

専門学科（商業・家庭・看護・福祉・体育・国際）に係る

有識者へのインタビュー実施状況

学科	氏名	所属等	実施日
商業	川口 護	株式会社デイ・リンク 代表取締役社長	11月14日
家庭	鈴木 明子	広島大学大学院教育学研究科 (人間生活教育学講座) 准教授	11月5日
看護	板谷 美智子	社団法人広島県看護協会 会長	11月9日
	小山 真理子	日本赤十字広島看護大学 学長 研究科長, ヒューマン・ケアリングセンター長	11月20日
福祉	菅井 直也	広島文教女子大学人間科学部 教授 (併) 大学院人間科学研究科人間福祉学専攻主任	11月5日
	廣山 初江	社団法人広島県介護福祉士会 会長	11月5日
体育	東川 安雄	広島大学大学院教育学研究科 (生涯活動教育学専攻健康スポーツ科学講座) 教授	11月14日
国際	深澤 清治	広島大学大学院教育学研究科 (英語文化教育学講座) 教授	11月29日

※ 太線枠内の有識者についてのインタビュー概要を今回の会議資料として提出している。
なお、その他の方については、前回の会議資料として提出しているため、今回は省略している。

1 実施日

平成24年11月20日(金曜日)

2 インタビュー対象者

日本赤十字看護広島大学 小小学長

3 概要

(最近の高校生を見てどのように感じているか。)

- ・ 個人差はあるが、今は、大学1年と考えずに、高校4年生と考えるべきだと考えている。従来であれば、身に付いていた基礎基本が身に付いていない。もちろん全員ではない。
- ・ 具体的な課題としては、①基本的なマナーやあいさつが身に付いていない、②漢字が十分読めない学生もいる、③トップ層と下位層の1/5の集団とのレベルの差が激しい、等である。

(体力面について)

- ・ 看護師を目指す人は頑張り屋が多く、その点はあまり心配していない。

(広島県出身の学生の課題について)

- ・ 個々の分析をしているわけではないが、論文指導など、丁寧に指導する必要があると感じている。

(広島を支える人材、または、必要な人材について)

- ・ 広島県、廿日市市からが大学設立の際に支援をいただいている。したがって、就職先は、広島県及び赤十字関連機関へ7割は行ってほしいと思っている。一方で、国際的に知名度が高い場所なので、大学において国際化、グローバル化を推進する取組も行っている。学生には、出身地が広島であることを大切にほしいと日頃、話している。

(看護を目指す生徒に対して、高校時代に身につけておくべき力について)

- ・ 自分で考える力である。看護に関する専門分野を学ぶ前に、科学的思考力やコミュニケーション能力を高め、感性を磨き、自由で主体的な判断と行動をすることが必要である。
- ・ 患者に対して、状況を適切に分析し、判断してどう動くか、という実践能力が大切である。看護師の動きによって、患者が受けることができる看護支援領域に差が出てくる状況がある。特に、①人とのコミュニケーション能力、②文章作成能力(書く力、論理的にまとめる力)が必要となる。
- ・ コミュニケーション能力である。特にこの職業は、人を相手にする仕事である。対外的に、様々な人より良い関係が築ける力が大切である。そこがうまくいかないと、実習でうまくいかない。反面、学力的にはそれほど優秀でなくても、コミュニケーションがうまく取れる学生はスムーズに行く。大学だけでなく、社会に出たときも同様である。

※ 看護技術は、別紙の「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」(平成23年度2月28日厚生労働省)のP17にあるが、看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標が示されている。このような能力を身に付けるべきということで、できた基準である。したがって、大学、専門学校、衛生看護科等様々な看護師養成所であっても、この目標をクリアする必要がある。(広島皆実高校衛生看護科専攻科も同様)

(貴学での、グローバル人材の育成について)

- ・ 国際救援コース(定員20名)を開設している。コースは赤十字の精神に基づき災害支援等も視野に入れているが、コースを選択していない学生も履修可能。具体的な取組は、①ソルフェリーノ(アンリ・ジュナンが赤十字を設立するきっかけになった場所)やジュネーブ訪問(国際赤十字、WHO 他)の訪問、②フィリピンでの通信機関が不備な地域での研修、③米国大学での研修、④語学留学(イギリス)等である。

(本県には、1校1学科に衛生看護科を設置しているが、今後、少子高齢社会の中、看護師がより必要となる中、このような学校を増やすべきか否か。)

- ・ 私が長年いた神奈川県では、県立大学に看護学科を設立するときには高校をどうするか議論された。高等学校での看護教育として最初に設立された神奈川県立二俣川高等学校は、看護・福祉コースにして、看護師受験資格を取得しないコースとなった。神奈川県の方針ははっきりしていたと思う。

(普通科に7割が進学する実態があり、大学、短大、衛生看護科等、看護師を目指す、様々な道があっても良いと考えるが、このことについて)

- ・ 高校に関わる機会が少ないので適切な意見はできないが、他の保健医療福祉職は大学卒であり、看護教育も大学教育に移行しつつある。検討会報告書(資料)に示すように今日の看護師に求められる能力の高さを考えると、高校生に普通教科と、看護に関する専門科目の両方を学ばせるのは大変だと推察する。高卒後、大学で学んでいる看護学生も大変苦勞している実態がある。
- ・ 高校の時期には、①広く物事を見る、②受験勉強対策の暗記ではなく、勉強の仕方を学ぶ、③学ぶことの喜びを感じてほしい、と思う。

(看護に関する専門科目を普通科の教育課程に組み入れることについて)

- ・ 必ずしもそうすべきとは思わない。

(コミュニケーション能力の不足している学生への具体的な取組について)

- ・ 多様な取り組みをしている。

(看護実践能力の育成に向けた取り組み)

- ・ 阿品地域の方に「模擬患者」として登録いただいている。学内でこの模擬演習を行った後に、外部の機関へ実習に行く。また、廿日市市と連携して、高齢者及び育児支援の「阿品ますますイキイキプロジェクト(地域活性化プログラム)」を実施している。

1 実施日

平成24年11月29日（木曜日）

2 インタビュー対象者

広島大学大学院教育学研究科 深澤教授

3 概要

(広島大学に入学してくる学生も含め、最近の高校生を見てどのように感じているか。)

- ・ かつては、器の大きい学生がいたが、最近は小振りになってきた。良い子が多いが、リーダーになってぐいぐい集団を引っ張っていくタイプの学生がいない。物事を決めるのも皆で話し合っで決めるので遅い。
- ・ 人との対立を避ける傾向がある。劇作家平田オリザさんのお話のなかで「対話と会話の違い」という話があり、「対話とはもともと分かり合えないもの同士が、お互い説得しあい、意見をすり合わせてくことであるのに対し、会話は親しい人間同士が、分かり合うために話をするということであるという。いま日本人に必要なのは、対話の能力である。」と述べている。

(グローバル社会に対応する人材が必要とする力について)

- ・ 自分と異なった価値観や考えを持った人たちとコミュニケーションできる力である。日本人が外国語でやりとりできないのは、そもそもコミュニケーションができないからだと思う。場に応じて適切に説明することができない。
- ・ 留学中に日本や自分のことを語るのに苦労する。理由は、英語がある程度できても、相手がわかってくれるだろうと思っていることが相手になかなか伝わらないからである。
- ・ 大学生が、留学後に感じることは、①日本のことを案外知らないことに気づき、②日本の良さを再発見する、ということである。

(近年、本県の小中学校では、地域学習を発表し、アイデンティティの確立“自分が何者であるかを知ること”を図る取組を実施していることについて)

- ・ すばらしいことだと思う。グローバル社会で必要となる力は、自分のことをアピールできる力とスピーチ力が必要である。

(高等学校で身に付けるべき力や行うべき取組について)

- ・ 英作文の時間に、時系列の作文はできるが、その理由を尋ねられると、適切に答えることができない。物事の理由を述べて、意見や考えを発表する機会が必要である。
- ・ 対話ができる環境をつくることも重要である。「1人」対「多人数」の形式ではなく、「1人」対「1人」や「1人」対「小グループ」になれば、自然と意見が出やすくなるので、そういう場を設けないといけない。

(国際科1校1学科、国際教養コースを1校1コース設置していることについて)

- ・ 現在は、高等学校における国際関係の学科及びコースに対する社会のニーズは減少傾向にあると思う。国際に係る学科及びコースを卒業した生徒の進路状況が、国際関係の選択肢しかないのであれば、生徒は、敬遠する傾向があると思う。それよりも教育課程の中で工夫した方が良いと思う。
- ・ 拠点校としての学科を残し、それを普通科コースに普及させていくといったことが大切ではないか。さらに、生徒だけの側面だけでなく、教員の力の育成も必要となってくる。
- ・ 短期的に行うときは、学校を指定してやっていくことが良いと思うが、最終的には、その教育内容を広げていくことが大切である。

(近年、小学校にも外国語活動が取組まれていることについて)

- ・ 小学校等では、英語力の向上は高望みしないほうが良いと思う。

(「内向き」思考や外国に行くことが、億劫になる学生が増える傾向について)

- ・ 外国に行かなければ学べないことが少なくなった。日本で事が足りるようになってきたことも一因かもしれない。

(アンケート調査の結果、留学したくない理由は、生徒は、「言葉の不安」、保護者は、「費用面」がそれぞれ最も多い回答であったことについて)

- ・ 欧米の大学の学費が、年々上がってきている影響もあるのではないかと。
- ・ 中高でホームステイを経験している者もあり、「再度、留学しなくても良い」と考える学生もいる。
- ・ 費用面を考慮すれば、東南アジア方面を留学先に考えることも、選択肢の一つである。シンガポールは、英語力はしっかりしており、語学力の習得にも適している。英語は、欧米人の言語ではなく、世界の人の言葉であると考えべきである。